
愛おいしいショートケーキの中で

藻朱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛おしいショートケーキの中で

【Nコード】

N7876I

【作者名】

藻朱

【あらすじ】

ショートケーキをめぐる妄想

何が問題かといえ、そこに自分の場所がすでになくなっているということだった。これはうまれてこの方、経験したことのない感覚だ。偉そうに言うようだが、人は生まれて両親とか友達とか恋人や職場っていうような、何らかの繋がりの中に在りながらの位置役割を占めるわけだけれど、それが僕の場合、全部切れちゃったわけだ。原因がなにかということはあまりよくわからないけれど、ショートケーキの中に入っている苺と喋れるようになってから、徐々にこの状況は浸透してきたと思う。初めて苺と話したときはとても彼女はお転婆で食べれるものなら食べてみなさい！といきまいちゃあ、僕のフォークに捕まるまいと、皿の上を転げ回った。僕はカステラを食べ尽くして彼女の隠れるところを全部奪ってやった。そうすると彼女は、皿の隅に残っていた生クリームの中に身を隠したので、僕は手当たりしだいフォークで突き刺してやった。手にズブリとした感触が走って、耳元で何かがのどに詰まったような叫び声が聞こえた。真っ白な生クリームの中に、赤い苺の汁が滲みだしていた。

それからというものの、苺がとても愛おしくなって毎日ケーキ屋に通ってショートケーキを喰った。一日に何人も何人も、苺を喰った。キャンキャン声で泣き叫ぶやつもあり、腹の底から絞り出す声でなくやつもいた。でも最後はみんな一緒だった。みんな一緒に、真っ白な生クリームの中に、赤い汁をぶちまけて息絶えるのだった。こうした遊びを繰り返すうちに、僕の頭の中は苺のことしか考えられなくなり、友達とか、同僚とか他の人間たちと上手く喋ることができなくなっていた。徐々に僕の周りから人は遠のいて、今僕は大きなホール型ショートケーキの真中に、柔らかな生クリームに包まれて横たわっている。もちろん一人の人間としてではなく、一個の苺として、だ。世の繋がりから隔絶されてケーキの中でこうしてク

リームに包まれていると、自分の場所や繋がりなんてとか、どうでもよくなってくる。それにさっきから僕って言ってるけれど、もしかしたらワタシだったかもしれない。まあいいやどうだって。

今の私の唯一の願いは人と関わってこの人生を終わらせること。私が喰ってきた苺たちは、きつとそう願っていたのだろうなって、今になって思う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7876i/>

愛おいしいショートケーキの中で

2011年1月16日06時38分発行